

生涯にわたって学び続け、その「学び」を社会の中で生かす。「学び」から「行動」へ  
**地域で展開される住民参加の活動や NPO 活動などをとりあげます。**

今号の  
 視点

主に八頭町で果樹栽培を手伝いながら、農業の6次産業化をめざす「結梨」。活動のモチベーションとなっているのは、農業を現場で学びたい！という純粋な気持ちから。鳥大生の挑戦する姿を取材しました。



梨園で作業の合間に一息

大学生 × 農業 × 地域 同じ志をもつ仲間とともに

～ ゆいりん 結梨 (八頭町) ～

学生が集落に入りこむ

鳥取大学の学生 30 名が、主に八頭町の農家で農作業を手伝いながら、農業の6次産業化\*やイベントへの出店に取り組む「結梨」。「鳥取の果樹のおいしさを全国に広めたい」との思いから令和4年4月に発足しました。メンバーのほとんどは農学部生。大学では、実際の農作業にふれることはほとんどなく、「結梨」の活動をとおして農業を現場で学ぶことができることが学生にとって一番の魅力となっています。

実は、「結梨」ができる前から、NPO 法人 bankup が学生を農村に派遣する「農村 16 きっぶ」という仕組みがありました。この仕組みを利用して、ボランティアで定期的に八頭町を訪れていた学生が「結梨」を立ち上げました。

八頭町は、梨や柿などの果樹栽培が盛んです。高齢化による人手不足が深刻化するなか、結梨の学生が集落に入りこんで農作業を手伝います。「自分たちが入ることで広い農地を減らすことなく栽培を続けることができます」と仲村正人さん。

目標は大きく、アイデアで勝負！

「目標は大きく」と桐谷ひかりさん（きりたに）はにっこり。「農家さんがもうかる流れをつくっていきたい」と、県内はもちろん県外にも販路を広げていく考えです。特に力を入れているのは、農業の6次産業化。昨年は、自分たちがお手伝いしている梨園から提供していただいた梨や柿を加工して、イベントで販売しました。八頭町内でのイベントのほか、智頭町の「ちづ宿ハイカラ市」や鳥取市の「鳥取いなばのお袋市」にも出店し、八頭町のフルーツとジャムや柿マフィンなどの加工品を PR してきました。大学生が集落に入ったことによって、キズがあるなどの理由でこれまででは捨てられていた果実を加工し、付加価値をつけて売ることができています。

しかし、加工品開発の難しさも。「梨と柿って味の主張が強くないから、加工品にいかせない。正直言って、生で食べるのが一番おいしい」と話す福谷悠真さん（ふくとにゆうま）。「梨と柿の加工品といえば、ジャムくらい。なにか目玉になる、利益を出せる商品をつくりたい」と続けます。

また、全国から注文を受けたいとホームページを作成中です。桐谷さんからは斬新なアイデアが。「鳥取大学は県外出身者が多いので、学生の保護者や親戚にもアプローチすることを考えています。お土産とかで広げられないかなって。まずは、ターゲットをしぼってやってみたい」。

## お楽しみがいっぱい

活動当初からお世話になっている農家の秋山宏樹さんに草刈り機の使い方を習ったり、はっとうフルーツ観光園の方に家族ぐるみで食事会に誘ってもらったり。集落の方と交流できることも活動の楽しみとなっています。



あきやまひろき



触ったことがなかった草刈り機。農家の秋山さんに教わり、今では使いこなせるまでに



はっとうフルーツ観光園のみなさんとの食事会。おでんをみんなで作って食べました



お世話になっている秋山さんご家族との交流



子どもたちと梨カレーづくり at 湖山地区公民館



イベントで梨や加工品を販売



あらたな加工品として開発した柿マフィン



おやつ時間も楽しみの一つ。青空の下で

昼ごはんやおやつ時間も楽しみの一つ。「お昼ごはんがおいしくて。一人暮らしで自炊なので、作ってもらう温かいごはんに、もうメロメロ」と桐谷さん。定番のカレーは、具が鹿肉の日もあればビーツの日もあります。「自家製の黒ラッキョウがすごくおいしかった」と柳川祥乃さんは笑顔で話します。

八頭町以外で活動することも増えてきました。鳥取市の湖山地区公民館では、子どもたちと規格外の梨でカレーを作って食べました。「スーパーで売られているのはきれいな梨。おいしいのにキズがあるだけで価値が下がる梨がある現実を子どもたちに知ってもらいたい。この取組は、農家さんに少しは役立っているかな」と照れ笑いをする野口真美さん。

八頭町で有名なのは花御所柿と西条柿。梨は、秋栄、なつひめ、秋麗、新甘泉、真奈などさまざまな品種が栽培されています。

※ 6次産業化ってなあに？ ▶ 1次産業を担う農林漁業者が、自ら2次産業の「加工」や3次産業の「販売・サービス」を手がけ、生産物の付加価値を高めて所得を向上する取組。1次産業にほかの産業をかけ算して6次産業としている。

## 仲間とともに、チャレンジし続けたい！

今後、力を入れたいことは、消費者の意識を変えることです。

メンバーの<sup>なかむらまさと</sup>仲村正人さんは、鳥取市で有機野菜を生産する農家とも親交があります。話をするなかで、農家が抱える問題もみえてきました。特に、規格外の野菜が少量でたときに困ります。これを解決するために、規格外だけおいしい有機野菜を鳥大生に直接買ってもらうことを企画。スーパーの前で販売するアイデアも。

「自分たちの言葉で、有機とはどういうものか、虫がついているけれど食べられるとか、対面販売でお客さんに直接伝えたい」と、実現に向けて動いています。

もう一つ力を入れたいことは、販路を広げること。「例えば、梨や柿に自分たちの思いを込めた手紙をそえて売るなど、結梨の活動に共感してくれる方に売って活動費を捻出し、社会に貢献できる事業を展開していきたい」と熱く語ってくれました。

メンバー 30名中 28名が県外出身の農学部生



「結梨」Instagram

関わる地域と人、活動自体が学生にとって「魅力的」であることが大事！

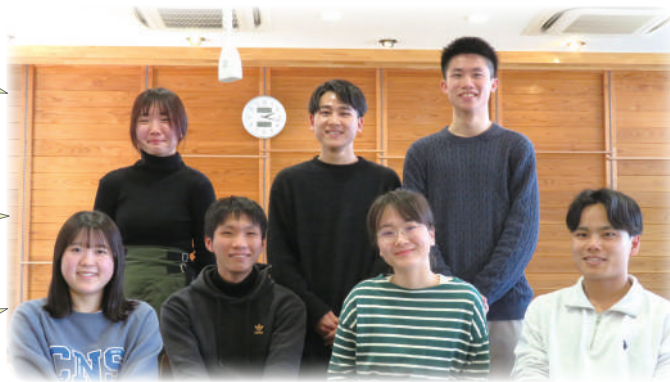
～ テスト期間を除く全ての土日、八頭町に通うメンバーに「結梨」に入ってどうですか?ときいてみました～

集落の人に、「若い人が来てくれると元気がもらえる」と言っていたことがうれしい!

梨が一番好きなフルーツになった。

地域の実情を知ることができる。

鳥取は梨が有名なことも、梨には品種がたくさんあることも知らなかった。鳥取ならではのことをしたいと思い結梨に入りました。



お話を聞いたのは、<sup>きりたに</sup>桐谷ひかりさん(左上)から右まわり、<sup>ふくたにゆうま</sup>福谷悠真さん、<sup>なかむらまさと</sup>仲村正人さん、<sup>みうらこうせい</sup>三浦光生さん、<sup>やながわしょうの</sup>柳川祥乃さん、<sup>もりもところた</sup>森本航太さん、<sup>のぐちまみ</sup>野口真美さん

大学の授業では、実際の農作業にふれる機会はほんなくて、年間をとおして栽培に関わることができるのが魅力。

一人ではできないようなことでも、同じ志を持つ仲間がいればつき進める。

「育てる、採る、加工する、売る」という一連の流れを見とどけることができ学んでいる。学生時代にこんな経験、なかなかない!

取材をおえて▶▶▶農業従事者がどんどん減って、耕作放棄地は増える一方。学生のみなさんは、地域の現状に危機感をもっていました。そのことをちゃんと意識して集落に入り活動をしていることは、とても頼もしく意義深いことだと感じました。

## 学生を受け入れている農家の方にインタビュー



<sup>あきやま</sup>秋山 <sup>さえこ</sup>紗恵子さん

鳥取に来てくれて「ありがとう」と言いたいです。学生たちは、鳥取大学の「人間力はどうだ!」というキャッチフレーズをまさに体現しています。鳥取の梨をしっかりと学んでほしいです。

道具の扱いなどを厳しく注意することもあります。技術面はもちろん心も成長してほしいので教育的な関わりを意識していますね。お昼ごはん、心を込めて準備しています!



<sup>なかや</sup>中屋 <sup>ふみお</sup>史男さん

農作業をとおして栽培の全工程を学ぶのは、学生にとってとても意味のあることだと思います。農業に興味をもって来て、一人でも二人でも将来、新しい農業を目指す学生がでてくればうれしいです。そのためにも、活動自体が学生にとって楽しくなるように、そんな気持ちで学生たちを受け入れています。

問合せ先

NPO 法人 bankup

〒680-0831 鳥取市栄町 627 marching bldg. 1F  
TEL 0857-37-3373

※ NPO 法人 bankup について、  
くわしくはこちら→

